



「出迎え三步 見送り七歩」



「出迎え三步、見送り七歩」は、井伊直弼の「茶の湯の極意」からきている言葉です。簡単な解釈は「お客様をお迎えする時には、三步進み出る。お見送りはもっと大切で、七歩進み出る」ことですが、もっと深い意味があるのです。身を乗り出してお出迎えし、お見送りをする事の大切さを説いたもので、身を乗り出すことから、「身送り」の文字を使っているのです。しかし、単純に動作のことを説いたものでもありません。「お迎え」を「お出迎え」、「お見送り」を「お身送り」という意味を考えてみましょう。「出」は、その行動が心から出ることであり、お見送りは、お客さまの姿が見えなくなる位まで「身」を乗り出して、「お身送り」することで、単に「お見送り」であってはならないのです。「いらっしやいませ！」と笑顔で迎えられ、帰りに「またお出くださいね！」と見送られたのはいいが、振り返ってみると誰もいなかったといういやな思いをしたことはありませんか？



自分の命の実感のない時代に突入!?



一度も痛い思いをしたことのない人間は、他人の痛みがわからないのは当然なんです。同じように、心の底から悲しむという体験を持ったことのない人間が、他人の悲しみに対して敏感であるわけがない。たくさんの人々に支えられて生きている、天地自然の恵みによって生きている、そして得がたい人間の生というこの命は尊いもので、自分の命ほど大事なものはないんだということを一人一人の人間が強く感じていたとすれば、なかなか自殺なんて踏み切れないんです。これだけ自殺が多いということは、たくさんの人たちが実は自分の命の重さというものを感じられていない、自分の命の手ごたえというもの、その尊さ、大事さがほとんど感じられていないという現実が、広く世の中に行き渡っているのではないかと思います。

今、若い世代や若い世代や子供たちの中には、自分の命というものの実感がありません。それは、テレビゲームで、スイッチさえ押せばたくさんの敵や群衆が次から次へパチンパチンと消えていく、ああいうふうになんか人を消すという感覚が広く行き渡った結果、私たちはひょっとしたら自分の命の実感のない時代に突入したのかもしれない。それはすごいことなんです。 「自分という奇蹟」(五木寛之)

